



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1

卷一
73
6443
1

公事根源目錄

公事根源目錄

正月

四方達

立春

供御藥

正月

元日節令

同日

立春日

供御藥

同日

朝賀

同日

內侍郎御供

同日

元日節令

同日

供御藥

同日

供御藥

立春日

御杖

同日

元日節令

同日

朝覲行幸

同日

元日節令

同日

視告朔

三月

元日節令

同日

御杖

同日

元日節令

同日

朝覲行幸

同日

元日節令

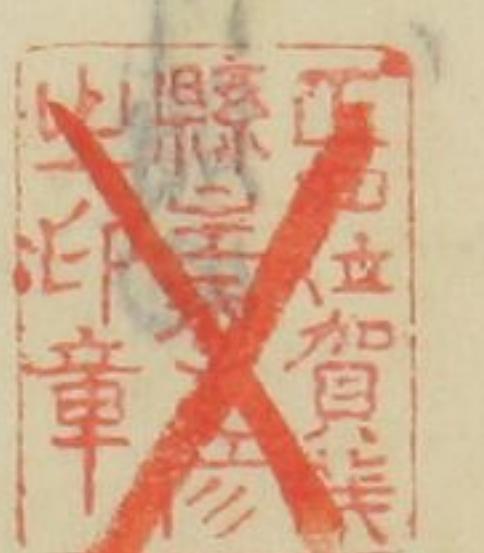
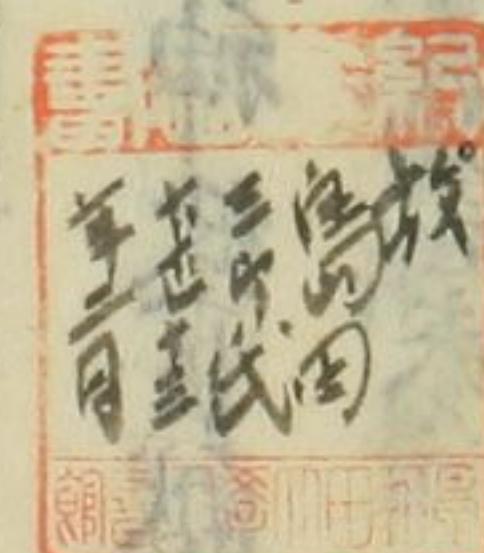
同日

視告朔

同日

元日節令

同日



七日
五日
六日

向馬節會

八日

御齋會

同日

真言院御修法

同日

太元仲法

同日

女叙位

同日

給女玉祿

同日

縣忌除同

同日

御齋會內論義

同日

獻御粥

同日

御薪

同日

踏寄節會

同日

射禮

同日

贈弓

同日

仁壽殿觀音供

同日

內宴

同日

國忌

同日

神祇官獻御贖物

同日

外記政始

同日

春書奏

同日

七瀨御祓

同日

火灾御祭

同日

代厄御祭

同日

火災御祭

同日

釋奠

同日

春日祭

同日

卒川祭

同日

上曾園并韓神祭

同日

大原野祭

同日

祈年祭

同日

列見

同日

小野御忌日

同日

祈年穀奉幣

廿二社二月七月
二度吉日奉元

同日

臨時仁玉會

同日

位祿室

同日

季御讀經

同日

三月

同日

春書奏

同日

五十二 御燈

三月

曲水宴

同日

五十四 藥師寺寂勝會

七月

石清水源時祭

中午

五十六 鎮墓祭

京官除目

五十八 東大寺授戒

五十七

四月

齋院御禊

六十 盖夏旬

五十九 告羽更衣

同日

六十一 大神祭

四日

六十 貢水

同日

六十二 山科祭

上巳日

六十三 稚荷祭

同日

六十三 松尾祭

四日

六十五 平野祭

同日

六十四 梵麻祭

同日

六十九 當宗祭

上酉日

七十一 梅宮祭

同日

七十一 廣瀨龍田祭

四日

七十二 檻階奏

七月

七十五 灌佛

八日

七十四 伴勢神衣祭

同日

七十七 日春祭

中申日

七十五 賀茂國祭

同日

七十九 中山祭

同日

七十六 賀茂祭

同日

八十一 駒牽

廿六日

七十七 言田祭

中子日

八十三 三枝祭

五月

八十四 獻菖蒲

三月

八十五 五月節會

八十六

端午節

八十七

左右近馬場騎射

廿五日

八十八

紫野今宵祭

九首

有無同

廿四日

八十九

竅勝講

九十一

著鉢改

九十二

賑給

廿五日

九十三

御贍物

九十四

供忌火粥飯

廿四日

九十五

供醴酒

九十六

延曆寺六月會

廿四日

九十七

御體御卜

九十八

供解齋御粥

廿二日

九十九

神今食

九十九

祇園序靈會

廿二日

百一

同日

一百

祇園隱時祭

廿二日

百三

節折

一百一

大祓

廿二日

百五

鎮火祭

一百二

道饗祭

廿二日

百七

施米

一百三

雷鳴陣

廿二日

百九

廣瀨龍田祭

一百四

同日

廿二日

百十一

乞巧奠

一百五

文殊會

廿二日

百十三

盂蘭盆

一百六

相撲

廿二日

百十五

祈年穀奉幣

一百七

仁王會

廿二日

百十七

八朔風俗

一百八

廿二日

七月

一百九

同日

廿二日

百二十

七月序節供

廿二日

百二十一

文殊會

廿二日

百二十三

相撲

廿二日

百二十四

仁王會

廿二日

百十九 小野祭

四日

百廿 定考

百廿一

不滿水放生會

十五日

駒牽 十宵

駒牽外近代
皆退安ノ由也

十一日

百廿二

季御讀經

九月

百廿三

季御讀經

三日

百廿四

御燈

四日

百廿五

重陽宴

五日

百廿六

櫻山

六日

百廿七

十月

七日

百廿八

射場始

八日

百廿九

興福寺法華會

九日

百三十

大根申文

十日

百三十一

御贋物

十一日

百三十二

御贋物

十二日

百三十三

御贋物

十三日

百三十四

御贋物

十四日

百三十五

御贋物

十五日

百三十六

御贋物

十六日

百三十七

御贋物

十七日

百三十八

御贋物

十八日

百三十九

御贋物

十九日

百四十

御贋物

二十日

百四十一

御贋物

廿一日

百四十二

御贋物

廿二日

百四十三

御贋物

廿三日

百四十四

御贋物

廿四日

百四十五

御贋物

廿五日

百四十六

御贋物

廿六日

百四十七

御贋物

廿七日

百四十八

御贋物

廿八日

百四十九

御贋物

廿九日

百五十一 宇山祭

同日

百五十二 松尾祭

同日

百五十三 大原野祭

中子日

百五十四 園并韓神祭

中宵

百五十五 五節

同日

丑日二月時上巳用或下丑日用也

百五十六 鎮魂祭

中宵

百五十七 新嘗會

中卯日

百五十八 豊明節會

中辰日

百五十九 老因祭

中申日

百六十 日老祭

下酉日

百六十一 月老臨時祭

同日

百六十二 賀茂臨時祭

中戌日

百六十三 焕三火御飯

同日

百六十四 大神祭

上卯日

百六十五 國忌

同日

百六十六 淑體御卜麥

十日

百六十七 月次祭祚令食

同日

百六十八 御佛名

十九日

百六十九 御髮上

同日

百七十 立牛童子像

大寒日

百七十一 荷箭

同日

百七十二 摶育

三十日

百七十三 內侍而仰神樂

同日

百七十四 御賄物

大寒日

百七十五 太祓

同日

百七十六 遊讌

三十日

公事根源ハ一條禪閣兼良公二十一歳時撰セラル奥書云應永二十九年正月十二日書之
 畢偏爲貞兒也外見有憚内大臣又一本奥書云右根源抄依柳營御所望後成恩寺關
 白兼良公子時不被見一紙之書被書進之此柳營者足利四代長得院義量也古筆屏風
 傳云兼良公一条太政大臣從一位關白准三宮號後成恩寺也經嗣公息博聞強記無書而
 讀讀無不通故倭漢之學識不愧古人自負才氣無歌學之師承將讀古今集慨然嘆曰一閱之
 市必立之平一卷之書必立之師况歌道之奧乎竟繫脣就冷泉持爲御學三代集之祕訣乃賜
 手書曰自今而可爲當家之羽翼云其手書至矣世家凡所著四書童子訓日本紀纂疏元亨
 釋書註文明一統記歌林良材花鳥餘情源氏祕訣源氏半立源氏和字抄古今祕抄新式今案
 追加重編職原抄令抄江次第註讓位即位御禊大嘗會和字抄公事根源抄除官雜例愚見抄
 連珠合璧東齋隨筆樵談治要關藤川記雪居春筆之慰尺素往來世説問答等此外雜著不可
 縷舉今記大綱而已

公事○論語雍也篇云

非公事未嘗至於偃之室也集註公事如飲射

讀法之類

根源○韓文儻濟無根

源

公事根源

正月

四方絃

一日

四方絃といひ事の元の音代附小ことへ及第
 云皇上於拜屬星座端笏北向稱御屬星名字
 七遍是北子军貪狼星
 子司命丑亥巨門星貞
 文子寅戌祿存星祿曾子卯
 西文曲星惠子辰申廉
 貞星字衛不己未武曲星惠子
 甲午年破軍星字賓大
 景子

山陵事延喜式諸陵寮
 式見分り又本書荷前所
 參考スレ

寶祚○卓氏篠林一寶

公事根源上

拜天地之座在一所拜陵座見江次第後醍醐年中行事御座皆兩面短疊也

一

所拜屬星座在西一所

南湖後
世作稻

祐帝位也。臣輒序云
長慶寶祚注易日聖人
之大寶曰位。

砌。字彙階繁

南溫大和國。多武峰
近所也。

天地瑞祥志。

天地瑞

祥志第十二云師曠曰正
月拜旦四方終日之間
有雲五穀成熟無雲爲
飢也有青雲氣大熟有
疾疫赤雲氣大旱不熟
白雲氣小熟人民小不
安黑雲氣小熟多水入
民小厄黃雲氣歲大熟
人民安樂蒼白雲爲小
水若小疾蒼赤爲小旱
若小疾蒼黃爲小吉有
土霧人民疾病也

まづけ其前アマツのれは置て書等
燈アリとそりへ此而アリて御絃乃儀式
ありじつ參殿アリ侍等アリと四方絳
といあけるアリとひい内裏仙洞移闕大臣家
するともみれに和人年正月寅ノ刻より天
地四方属星山陵を有 経由アリの御門
ナリ御記の御宿アリと也鷹觸といひ
文選江賦惟岷山之導江初發源於盤陽註觴酒酸也言發源小醜
ハリモニ白雲極天會雨と約既アリて南湖ノ河
三十六代
カリ
トヨリ幸有て四すと溝ト経久アリ
寛平御記事也

ナリテ御本紀の傍ら於ト
は乞ナリトモアリトモアリトモアリ
共ヒト属里アリアリテ災難とのそく也
天地瑞祥志といふ書小アリ

二 御藥

同日

是ハ先ニ乃ハ御歟アリ御歟アリテ、かこなりム
ト書御座例御直衣上書
衣セトナハ次承ノ御つ代ーのよ小アリ
めテハ膳の典手典藥以も生氣アリ代
圭璧卷河海松齒固事江次第抄云齒謂人軍齡也齒固者延年固齡之義也
鏡火切手歎之御厨子而アリ御薦固ト傳ヒ

屠蘇。間書卷之三十
八風俗志。屠蘇酒。華陀

與魏武帝方也。四時

纂要曰。屠蘇。思邈。華佗

屠絕鬼氣蘇醒人魂。

小兒リム。四民月令

云。正且進酒。次第當從

小起以年少者起。先晉

海西令問董勛曰。俗人

正日飲酒。先飲小者何

也。勛曰。俗云。小者得歲

先酒賀之。老者失歲故

後飲酒。

鬼間。清涼殿。アリ。

禁祕。松云。二間格子。

南間常不正有覆盤

之其內南北行立御

安置御膳具。

古今著聞集第十二云

鬼間盤百澤玉ヲカミを

古今著聞集第十二云

東戸向アヘン。千金左云

鎮シケル故ニカレタ事トハ

申シタモタ方な説ヲレ

東戸向アヘン。千金左云

於東向戸中飲之。

事ハ昔彼間ニ鬼スミ食タ

鎮シケル故ニカレタ事トハ

申シタモタ方な説ヲレ

後取。名目松云後取。

元三御藥除夜藏入定

其人元日四位二日五

位三日六位

交名切紙。江次第云

復取。元日

二日某朝臣

三日某

必然者近代不

並用高戶

元日六分

二日五位

三日六位

令婦為人役送至シテ飲タ乃次第シテ小令婦シテ先シテ藥子リコとシテ小女シテのいもシテ嫁マテする
 とシテとシテ先シテ此シテ成用シテ起事シテ至シテ屠蘇トソ之シテ小鬼サウニ
 とシテよりれじとシテ奉文シテあまシテは其シテあシテ小小女シテ
 を撰シテとシテとシテじふりシテのまシテじふりシテ後シテ飲酒シテをシテとシテ
 鬼ヲ間アヘンとシテとシテしとシテすシテとシテ後シテ飲酒シテをシテとシテとシテ
 小女シテのシテ女官シテ曲藥リクヤクをシテとシテてシテ御藥リクヤクをシテも
 とシテ一シテかシテ先シテ屠蘇トソ代シテ酒シテ小シテへシテ藥子リコ
 のシテ次シテ小銀器シテよシテ曲藥頭リクヤクこうシテとも
 いせんシテ小法シテ不主シテと座シテとシテ後シテ飲酒シテをシテとシテ
 江次第六高戶トアリ唐三八太戶云。餘今序錄卷之四十九云。人能飲不能飲有大小戶
 之稱。唐宋酒令詩話多矣。今人殆相循而至爾。或問此種定起何時。豆志孫壁
 餐宴入以七升爲限。小戶雖不入。立燒薑取盡是三國以前。燒薑者。已有此旨也。
 その日奉行シテの爲シテ人交石シテとシテきりシテ多シテにシテある。す
 てシテ敵アヘンとシテとシテ在シテ小シテとシテ也シテとシテてシテ此シテ獻シテは
 神シテ的シテ向アヘン敵アヘンとシテ供シテとシテすシテ。はシテアヘン代シテ酒シテ

大根多江次第云
多給大根，正月人多精進之故，或給串刺裏書，安藏人居扇上賜之。

後取度嶂散
○延喜式注度嶂散山惡氣。

御名やク御膏藥ト書力名藥名忌テ名藥ト号也千瘡膏ト云々也

也。江次第云主上取之以右手無名指分塗於左掌給曲右第四指是藥師印相也乃用之裏書後醍醐院抄傳御額並耳裏。

一人是ヲミシハ千金方云一人飲一家無疫

家飲一里無疫。

荆楚歲時記案練化篇云正月旦奉雞子赤豆板辟惡氣又云梁有天下不食葷此不復食雞子今案至元日精進人公染武帝好佛遺風及
と如御茶の儀式、三ヶ日行り第三日當

沖立イタツ腰ウエストと奉教銀器小入たりせ名持ミハラシ付く御額オカツ并小御耳オカツ乃うに付せスル也是の藥師下桐シタコにて行こ也此御藥の儀式是十二代乃第四乃持と仰ゆくは是も也是の藥師乃第イチ天寶弘仁年中ヒサシめシテ一人候城天寶弘仁年中ヒサシめシテ一人是との事シテは一家不病なりシテ一家不

是と飲ぬ生シテ一里小病シテ一どりよめてに

き功能ヨシ仰マサニきシテ年ヒサシめシテ小是シテとす

三 御節オカツ傳タチ

同日

後院見供若菜釋

苦寛平比嵯峨源氏有善恐此人

毎節毎佳節也小右記云内膳御節供以御臺盤供之別納所又供御節供從臺盤所供

有シテ異事シテいゆくと

四 朝貢

同日

是と飲ぬ生シテ一里小病シテ一どりよめてに

き功能ヨシ仰マサニきシテ年ヒサシめシテ小是シテとす

鼓ヲ卒鉢ノツ。元明

天皇八年春正月甲申

朔天皇御大極殿受朝

皇太子始加禮服拜朝

陸奥出羽蝦夷并南島

每美夜久度感信覺珠

義等來朝各貢方物其

儀朱雀門左右陣列鼓

吹騎兵元會元日用鉢

鼓自是始矣類聚國史

七十一

近仗。江次第抄云近

仗謂近衛次將也

樞原官前傍山東南都

ヲ立冬ニシ時皇居名也

日本紀見アリ。日本紀

六見アリ舊事紀見アリ

○舊事本紀五大歲辛

酉正月庚辰朔宇摩志

西元年正月庚辰朔宇摩志

神橋以齋矣謂五十插

亦云今木刺縫於布都

主劔大神奉齋殿内節

藏天爾瑞寶以爲天皇

鎮祭之時天皇寵異特

葛詔曰近宿殿内矣因

号足尼其足尼之号自

此而始矣

同書ノ後立。日本書

紀二十五大化二年正

月甲子朔賀正禮畢即

宣改新之詔

古大極殿毛リ方也類

聚國史七十一歲時部

大平十四年春正月丁

未朔百官朝賀寫大極

殿未成權造四阿殿於

此受朝焉石上樞井兩

氏始樹橋左經記

云案大極殿體非寢非

堂所謂廟作也。諸寺金
堂皆廟作也。

小朝鮮

或三十六

五 小朝鮮 同日

此事の事は後下りて元日してあれど天子と
奉ふべからず。傳くばこのへるが事小

君子廟也。大寶感云
身無私照至公無私

親一十五大寶二年

文選四十二李周翰注朝廷天子也

卒代

事佛事も心とて傳ひ是れ私ノ礼也。君主

私也。云又も不宣事もて延喜ノ御室小

勅も近喜八年より左衛門時平公小傳

傳す所傳也。抑御室、百官意あどと雖と

之れども小朝鮮は後下りて百官と

御室が延喜八年私家小私ある事よ似ありとて
御室を除くや後小治下在元正ノ日君成
有奉公事ともまづりかず。傳くは同十九
年小太ヒノ志とく御ノ禮傳也。其勢延
喜六年小治下ノ御室はとく統王房給一か
とも當代の事。達いが御室の儀式ありそ
と。臣子は通はあひうるの儀。之れにいそつ
治下の事の事はとく統王房給一とてか
皇傳。自伝云れ御室の事も共
あり。圓向大臣以下是と奉公儀つて

舞踊○拾^{タマ}中未舞踊
事^{ハシナガ}五舞^{ハシナガ}置立^{ハシナガ}左右左居

左右左懼^{ハシナガ}舞^{ハシナガ}立再拜

元日節會○江次第六

元日宴會トアリ

内^{ナカ}舟○江次第抄第一

大臣於承明門内^{ナカ}辨備

諸事故曰内^{ナカ}辨第二

臣於門外辨備諸事故

曰外辨

上職原抄云官

事一向左大臣統領之

故云「上閑白之人爲

左大臣時右大臣行」

上事是依閑白與奪也

同下云是執柄依執

天下之政無其暇仍官

中諸公事併與奪大臣

之故以次人爲「上

部問諸司具不文名外

付藏人奏之入^{ナカ}辨

令候列諸司奏可付内

侍所由件次被奏^{ハシナガ}若雨

降若諸司中務省御曆

奏官內省水樣奏^{ハシナガ}水有

也以右腹赤奏^{ハシナガ}若違期

日奏^{ハシナガ}若當卯旦卯杖奏

等也奉御假外記

七曜御曆^ス延喜式

中務省式云其後官人

率陰陽寮入直建春門

進七曜御曆輔以上一

入留奏進其詞日中務

省奏^{ハシナガ}陰陽寮供奉^{ハシナガ}其

年七曜御曆進^{ハシナガ}良久申

賜止奏^{ハシナガ}無動答若親王

良久平忍美恐美毛詞^{ハシナガ}他皆放此

冰樣○江次第抄云宮

内省冰様奉主水司奏

之此司屬宮内省冰様

者冰室厚薄寸法以瓦

石爲其模奏之

〔官内省〕延喜式宮

内省式云凡藏冰之處

收冰多少及冰厚薄每

處具錄元日群臣未喚

之前省輔已上將本司

入奏并進冰樣其詞曰

官内省申久主水司能

今年收冰合若干處

冰若干室厚若干已下

若干寸已上益自古年

若干室誠自去年若干

室供奉礼留事申給人太

宰府進留腹赤乃御賛

一隻長若干尺進平樂久

申給登申

水池風神主水司式

云冰池風神九所祭山
城國五所大和國一所
河内國一所近江國一
所丹波國一所

勸修寺他山城國五

所之隨一也名所方角

松云小野池六勸修寺

池ヲイリ延喜柳寧水池

ト云也

大法林法事行りれども今りとく氷て
固むとまきとれども法奉持也者仁治
天祐元年十二月有小額田大牛馬
室子開鶴と云ふと山の小の
かり露中と毛利氏は巻と作りて
様行する所と人と毛利小作人と
とアモ時か陰山のあり小作人と
との勢終小氷室なりとア室子れい
も氷浅いいうれどもおとせんと山の小の
云生と一丈河より源くお城主と小寄と

茅蓋キカマアツシテ原野アツシテ水を置シタケル小舟スモウ

ていふうかうた四半チヤクハととけと風波カキラ

熱エトシ月ムツ少シり升アツムこかせ其時ソノトキ皇子ミコトノミコト子母シマツ

と仁德ニンテイ聖セイ御門ミツゲ小奉コトハシ給ガフられアリす

所シテ小殿コトハシ感カクシシテ也カタシ又アタマよ

との如シテアシテ是承シテ天ミツ始ヒタチシテ後アシタ季シキ

冬ヒタチに光ヒカリて天ミツ國ミツコト而アリ小水宮コトハシミツコトと

重シテれ仰アツムうりまく腰ハシマカ替ハシマカハシマカとシテ魚ウニと流

紫シモツり奉シテすり青シモツの袖シモツとシテ京ミツコト會シテおも

供シテおもシテや腰ハシマカ赤シモツの食シモツ様シモツとシテおも

ひく成シテるは衣アラハシて食シモツり累シモツの天ミツ室ミツコトの御ミツコト行シテ

紙シモツ紫シモツの園シモツ宇シモツみシモツ都シモツ也シモツ滴シモツて海シモツ人シモツ見シモツと

珠シモツ磨シモツ噌シモツ々シモツ還シモツ駕シモツ之シモツ時シモツ泊シモツ

御シモツ船シモツ於シモツ濱シモツ云シモツ又シモツ御シモツ船シモツ左シモツ右シモツ游シモツ魚シモツ多シモツ之シモツ棹シモツ人シモツ吉シモツ備シモツ

國シモツ朝シモツ勝シモツ見シモツ以シモツ鉤シモツ之シモツ多シモツ有シモツ所シモツ獲シモツ即シモツ獻シモツ天ミツ皇ミツコト勅シモツ日シモツ

所シモツ獻シモツ之シモツ魚シモツ此シモツ爲シモツ何シモツ魚シモツ朝シモツ

見シモツ多シモツ物シモツ即シモツ余シモツ陪シモツ佐シモツ余シモツ其シモツ舉シモツ也シモツ

宜陽殿シモツ元子シモツ江シモツ次シモツ第シモツ當シモツ日シモツ平シモツ明シモツ令シモツ主シモツ殿シモツ察シモツ掃除シモツ南シモツ庭シモツ云シモツ

云シモツ天ミツ皇ミツコト著シモツ御シモツ帳シモツ中シモツ倚シモツ子シモツ近シモツ伏シモツ御シモツ帳シモツ內シモツ辨シモツ著シモツ宜陽

殿シモツ元子シモツ內シモツ侍シモツ臨シモツ東シモツ檻シモツ內シモツ辨シモツ起シモツ座シモツ微シモツ音シモツ稱シモツ雅シモツ經シモツ宜

陽殿壇上坐行出直軒
廊東第二間斜行到左近陣南薦謝座再拜頤向先一揖次再拜次乾揖右迴經軒廊并東階等入自廊南一間母座帶鉤人南傍行一兩步爲不令開門左右將軍八人開承明并左近衛八人開承明并左

禮闈司分居內辨召舍人臣大舍人四人同音稱惟於承明門外云云

坐者內辨大臣蒙昇殿著座之詔命而先致拜謝之禮也先後一揖者起居之節再拜者拜天子之意也知足院關白被命云乾是天位也集天者是拜天子之儀也備所江次第抄云尚

渡正面門承明門也左右腋門長樂永安門也建武門相當承明門也時百官皆在門外至是命開門者令群臣放入也ニキイ江次第抄云諸可昇著掌上所敷之座也引聲召之時曰敷尹江次第云內辨宣侍座引合又云群臣再拜謂之謝座堂上著座謝立也又云酒正授空盞於貫首人羣臣再拜酒正歸間起如上謂之謝酒飲酒謝元拜也粘膾也○倭名抄十六飯餅類黏膾餅色立成一作似人眼膾也上女麻反下音齊同鱠罐唐觸云畢羅二音

外辨小次く長樂門の東の脇をり是の向事也今後代小いもんぎれ而くノ人多事也家とて既なり肉弁宣陽殿乃元子ノ内後謝座は做もとく滑代界て當ノ内凡子はほく以乃乃作法速退ア内辨閑門と館く食人ニ一齋めとめと江次第抄云實今とけむるためより大車ノて家ノれに猶ガ史記魯世家註故賢故事之是者文選四十六注故實先王之道也江次第抄少納言掌宣傳小事也
少納言者爲召少納言也江次第抄云小次也示少はわ納云猶ひとめと次第小外辨内止角りもとくみく來ゆると
ノノ内辨小列立内就坐ノ後小太白を説小

大納云之は後小三位中納云其後小四位率相立内一位中納云之大納言乃東よりニ三位宰相の中納言流れるが爲め此是位重也チテギハシナカヒツメタコウ下

肅指すり當ノ内辨有きやん我作ヒトモキヤンハ吉宮ノ後内辨有きやん我作ヒトモキヤンハ

仰膳シキテラ仰起時群臣謝座二種云謝酒器二種云

内膳入自月華門供御膳供八盤諸臣諸仗共立供次之膳

毛と供ヒトモ後やく腸ノ仰膳或供ヒトモ御膳事江次第見たり

種内

藥名

字亦作必累。俗云比知良餅名也。

同鰯餅四聲字苑云鰯餅今

者與鰯同俗云鰯餅今

索餅寄食也爲餅名未詳

餅名煎麵作鰯虫形

也。

江次第抄

云麵如索繩也。

國柄奏。宮內式云凡

諸節會吉野國柄獻御

脣奏歌曲每節以十七

人爲定國柄十二人笛

二人在山城吉野國柄

國喜郡吉野國柄

川ア。日本紀云然自

此之後屢參定以獻土

毛其土毛者栗菌及年

魚之類焉。

物也餠鈍素餅のめぢ切きやすれの形も圓形大

江次第抄云一索餅也。

國柄奏歌篇於承明門外一處安

日本書紀十

國柄哥也。奉事と是

れぬ。ニ鰯乃儀を一鰯よ國柄哥也。奉事と是

年十月小吉野内之小行幸ア。付國柄人

參く一酒法奉りと寄とひ多も皆

日本紀ア

と人山添ありとれくらひ又とれと寄と

歌日本紀ア

名とは毛添とけが坐くと味とて食ふ

傳清手

とくや吉野丸河とすかく巻

國柄川上テ全ア吉野ヨリ五日路奥也

姫よりされぬれい路さうとすかく其の

歌日本紀ア

小來終止分車不許とひ金すきと其の

歌日本紀ア

常少益て年魚腹うれし物代歎クムこと

大夫達亦伴當

今乃國柄内奏として寄酒添ひ坐候トキ

給宿命

心ナリ二鰯小行酒法奉使乃儀をニ鰯

羣臣兩段再拜

よ立樂各二曲減奏ヒモ後官令下計殊

正月代

リ日月華門ヨリ左右樂

天皇年中行事立樂ア

人春庭樂ヲ奏ノ馳道

スム左右各二曲萬歲樂

地久賀殿長保樂十也臨時勅ヨリテ此比各三

曲ア大方近來此事

黨代舊文ヨリコセル也宣命正月一日宣命案

天皇我詔日良萬宴

命平衆諸聞食宜今日波正月朔凡乃豊樂開

持統天皇四年正月小吉節代内裏小召

食須日介在利又賤毛
寒介依御被賜波久宣

宴會ト書仁德天皇紀
宴會ト書テヨノアカリヨ

神武天皇御宇日本紀
神武天皇紀天皇以其酒
酒賓助軍卒

續日本紀寶龜四年正月丁丑朔宴五位已上於內裏賜被

裸玉篇云賞賜也

御宇四年正月丁丑朔宴五位已上於內裏賜被。酒と給一車の日年紀かたより是がとども車法發つてへきだ先に至る。寶龜四年正月丁丑朔。天照大神乃天忍穗耳尊而祝之曰吾兒視此寶鏡當猶視吾可與同床共殿以爲齊鏡。

七 内侍不御共四月

三種神寶授答テ。神代卷下天照大神乃賜天津彦火瓊瓊杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三種寶物。我見分ノク。○神代下天照大神乃天忍穗耳尊而祝之曰吾兒視此寶鏡當猶視吾可與同床共殿以爲齊鏡。

是の毎月小法也。也寛平年中小坂此内侍本とアヘ三種の神忌乃其一也。乎半振神代の事也。天照太神也。天照大神乃天忍穗耳尊而祝之曰吾兒視此寶鏡當猶視吾可與同床共殿以爲齊鏡。御宇四年正月丁丑朔。天照大神乃天忍穗耳尊而祝之曰吾兒視此寶鏡當猶視吾可與同床共殿以爲齊鏡。

五十鈴川今内宮宇治
河也

御記天德御記也

御記曰天德四年九月

二十四日鑿求溫明殿

所納之神靈鏡并大刀
廿四日鑿求溫明殿
人室第十代崇神天皇乃沖時常築城の
ノミ禮で神代より主納り一冲後城の汗

勞國卒ト終ル上ホアムナアスル是名今德
御努室左御宿ナリスノ被新造の御後
ミハ室居小至アラニシニ仁天皇の御宇
鏡徑八寸許頭雖有小
瑕專無損圓規并帶等
甚分明見之者無不驚
感釋日本紀第七引之
内宮一也

トハ室居小至アラニシニ仁天皇の御宇
ミハ温明殿起ケリ村上天皇計御宇ヲ作
トハ漸御威恐モセシム別不トハ金門
立温明殿起ケリ村上天皇計御宇ヲ作
李代

三年九月廿三日庚申夜

内宮卒ト終ル此沖後城の汗小至く矣
破損トシテ事ナリト一冲御紀小之モ禮

トハ有統子御後南殿ノ様アホニ施シテモ
トハト小聖実ノ國而ハ神小稱トシテ後
實賴公

仲トソノ経色作事ト御村ト乃御紀モ
實統トハト御子也

二年没落京

三年後文治元年三月廿四日

小野宮關白袖○禁祕
抄云天德燒亡飛懸南
櫻川野宮大臣謹袖也

二位尼○山槐記云平
時子清盛懷安德天皇
没于海

トナリキ御後南殿ノ様アホニ施シテモ
トナリキ御後南殿ノ様アホニ施シテモ
の足を帝と懷ありくとも御心も主に
トナリキ御後南殿ノ様アホニ施シテモ
ヘタリキ御後南殿ノ様アホニ施シテモ
トナリキ御後南殿ノ様アホニ施シテモ
神宮内院御前ノ御跡ノ御跡ノ御跡

辰巳方

主上御冠ハ必元アリ

公事本源一

江家次第十一云内侍所者神鏡也本與主上

御同殿故院被仰云帝主冠巾子左右有穴是内侍所御同殿之時主上支不能放冠給御眠之時御冠屢落仍以插頭華自巾子穴通御鑿也

白川院○禁祕御抄云

白河院御宇仰曰内侍所神鏡飛出欲上天而女官懸唐衣袖奉引留板此因緣女官奉守護

觸穢時恒例供神物先例不同歟寛治八年陽明門院崩之時無沙汰後三月母后有内侍所御供三月一日也去年內大臣穢及禁中時供之今度諸社祭雖延引准彼例有供物但又被止有例

内裏觸穢

○禁祕抄

軍中邪氣ノゾトキ奉文真祐本草云新汲水却邪調中下熱氣竝真欲之本草新汲水每朝一番汲之テ水也

主上御冠ハ必元アリ。主上御冠カウアリ。

江帥。大江氏太宰帥也。江次第抄云江帥次篋云飲御若水之時有祀萬歲不變水急急如律令

云

後院

○拾芥中末後院

四町五條坊門南五條北大宮東堀川西江

次第八裏書云後院謂冷泉院朱雀院等

○源氏物語若菜卷河海抄云十二種若菜

薊 芥 茄 芹 蕃 薺 菓 芥 茄

蓼 水雲 芝 菘

此中菘 松葉說引白川院松 獻人方生之辭事也

上仰乃大外記師遠

ハ小大根由申凡其說

ラ用ラ乞由見舊記

あまくは膳更先供供あらそり江帥 遠處御
江次第小ひあああ供のじ阿兜ととめとま車

ととえとと利

九 供み葉 上三百

内苑察りしむ小内膳可より正月上内省
足以奉つて寛平年中より始まつた事小

や延喜十一年正月七日承後院より七種内省

村上天皇

菜と供と又て度四月二月廿九日女御あす代

安子藤原氏師輔公女也

後院の菜供奉

李部

式部卿兼明親王延喜皇子也

たり希菜供十二種供奉あり其く

あか。モニヅク。陸。せり。蘿。ひがな。あ。ひ。芝。蓬。

菜

繁葉

芥

葵

蓬

シテ蘿。モニヅク。松。こみ。モニヅク。松。字。事。白川

和名抄依。若松。溫菘誤也

此中菘。松葉。白川。院。松。字。事。白川

院。松。字。事。白川。院。松。字。事。白川

院。松。字。事。白川。院。松。字。事。白川

院。松。字。事。白川。院。松。字。事。白川

院。松。字。事。白川。院。松。字。事。白川

院。松。字。事。白川。院。松。字。事。白川

院。松。字。事。白川。院。松。字。事。白川

院。松。字。事。白川。院。松。字。事。白川

ととえとと利

師遠。江談抄第二云
大外記師遠諸道兼學
者歟今世尤物也能達
者不劣中古之博士歟
職原大炊頭下近代
大外記中原師遠子孫
相傳之溫職中尤膏腴
也

コホ子。和名抄溫菘
崔禹錫食經云溫菘音
和名古味辛大溫無毒
保祐者也

正月七日

歲時記

云正月七日爲入日以

七種菜爲羹

子日。拾芥上本云正

月子日登岱何耶傳云

正月子日登岱遠望四

方得陰陽靜氣除煩惱

之術也十節記

扶桑略記宇多天皇

寬平八年閏正月六日

有子日宴行北野雲林

院云

○管家文草第六窟從

雲林院不勝感歎聊叙

所觀序云予亦嘗聞于

故老曰上陽子日野遊

厭老

○又曰倚松樹以摩腰

習風霜之難犯也和榮

夷而啜口期氣味之克

調也

○圓融院ノ子ノ日ヲササ給ル

送有ケルニ一年此所予子

日ササ給シヲ思ト出

行成卿カクシミレケル

ヲヒシ常ニ三幸ハイキニ

煙ソハヌ旅ソ悲シキ出家

ニハナケシモ思入允意深

ク柔エ

日本紀五。日本紀三

十持統天皇三年正月

乙卯大學寮獻誠八十

枚

○卯日タニシ枚故タシエ

上云文德實錄六剛卯枚

ト書名漢書王莽傳中

云正月剛卯金力之利

服虔曰剛卯以正月卯

月作佩之長三寸廣一

寸四方或用玉或用金

子日遊

毛ひじりとて望へみる子日とてねと

引きもや笨菴院圓融院ニ參院すと仰附

ゆきけ仰起いきあらうしや仰くも圓融院

の子日とおさせ居らうへ寛和元年二月

「見小野宮右大臣記」

十三日のゆきや跋の經仰御車也——^{六十四代}紫野

とく成て上室の御馬小笠それなりに右

大駕以下皆直袴にて殿上人仰御衣

轍乃をとまつて傍と引先ぐ——^{六十五代}小遊

とくつて小松浦ひとて被袴あり御物

わひ門松破子やうのねとすらんと和琴清

然と其財内布がい平疋密くうや清原

元輔曾孫好忠うといふ哥人ともとて仰

リ室とて被財内哥人とい代とて集ま

ひ居んまく引んぬか

土御枚

持統天皇三年正月内卯日大學寮獻誠

毛氏奉もは日本紀があり又に壽二年正

月小松浦府銅枚と申——^{六十六代}松懸氏

だくゆり毛氏がく毛鬼代拂ふむらなり

周禮。周禮春官大宗伯春見曰朝夏見曰宗秋見曰觀冬見曰遇時見曰會殷見曰同此六禮者以諸侯見王爲天漢高祖八史記高祖本紀六年高祖五月一日朝太公如家人父子禮太公家令說大公曰天無二日土無二王今高祖雖子人主也太公雖交人臣也奈何令久主拜入臣如此則威重不行後高祖朝太公擁篲迎門却行高祖大驚下扶太公太公曰帝人主也奈何以我亂天下法於是高祖乃尊太公爲太上皇心善家令言賜金五百斤

所引又仁以之沖門母后小紅きんのと先
吟泉院小行幸方か彼时沖門南澗之處
うりて崩とありあくへるる事も
行ノ也周礼云因秋日觀とアリテうり毛
云小紅きんのとあら人の沖門よりも其ため
一を車かうして又東寢成人の仰け
御とんの義を元正月御門奉至ニ年正
月小大極廟小出御なりて東寢すまくは不
足候小主後之度御車ナリ又天長十
四年正月

國史此國史續日本後紀也

文王世子名レト禮記文王世子篇云文王之爲世子朝於王季日三
難初鳴而衣服至於寝門外門内鑿之御者皆今日安否何如內豎曰安文王乃喜及日中又至亦如之

○桐壺卷河海抄上達部殷上人也堂上總名也

年三月小淳和御門紫宸殿小坐御
東文紅觀乃儀もと羅殿乃後御衣と居
东文紅色御衣と拂蓆
文王流世子アリトヒテ生季小紅もと
事日小三度ナリト礼記小文紅もと是
うそとて東文紅きん禮例とヒテ風うそ

西條時宣

因日

ちり言意あらずひをうれ事」や事
或ハ一日小也又四月なくなり視告期
かよて行ひとくと二文字小じう

國忌職負令義解謂先
皇廟日也。日本紀二

國忌ヲハテ訓ス

○村上天皇醍醐天皇
第四之子母皇太后藤

原穩子昭宣公第三之
女也

○弘徽殿後醍醐院御
御文庫本點也
御口傳引
河海抄

六十二代
御園忌

四月

正月四日御上天室乃母后木御圓忌也
不屬九重正月小御門宸筆と深く至清
華院成アラ
儀約さ其後法性寺アラて毎年小御八條乃
御りと小御門事なり大も清筆

八條と少事ハ勤操サトキ少門乃極武天室
八人分法華八卷アラ四日朝夕一座各講一卷名法華八講
亨釋書勤操傳

議所アラ私議所在日華
門北被勸盃辨少納言
相分勸與端内豎取瓶
子裏書アラ

舊文。江次第云件舊

入五位已上歷名一卷

諸司主典以上補任二

卷下武官主典已上補

任卷令外官一卷諸

國主典以上補任一卷

下十年勞帳一卷

江次第云盛續紙二

卷於柳籬兩卷七八枚

同云次叙一加階者

姓尸某從下一姓尸某

同是殷上一加階也。

丘頭藏人今檢簡之後

欽之

氏爵申文。江次第云。

件氏爵等申文在硯官外記史依上且叙之件申文在硯官入內並一加階叙位之間叙從下後令殿上辨召外記勘文不人物進之每事被間外記諸官給雖下

姓叙內階自餘依姓叙内外階若有疑姓者先敘外階後日依愁敘內

階朝外是朝臣姓敘外內階也如清原真人宿禰連直公縣主忌子首王平源藤原橘

菅原大中臣高階在原宮道已上不敘外階必敘內階敘畢入官奉執此覽畢給後大辨退

始第ノ仰前乃度よはく閑向すひし
執筆大臣謂閑白外第一大臣

執筆めからて冬座小すとそ浦執毛十毛

江次第二二十葉申文被補加階之趣也

卷二十一葉勘文可案取報人數
江次第西宮云五位從上

仁乃爵ノ内一加階助文今ノノシテ
月ノうりノ冠位とちかくノ元年小治大
此十二階也今ノ光ノは勢りゝれ事か
仁小仁大礼小礼大絃小絃大義小義大智小智
仁小仁大礼小礼大絃小絃大義小義大智小智
三十九代

七
三四代
天智乙皇后十一年正月小德王佈臣よ爾位

トスヒミノリ此敘位毛ノはと日ノ
ノ成天德八年ノウカノ小姫ノ此義ノ
嘘ナホトシカホヘベリ節會ノ極急ナリ
トスヒミノリ小ニテ角終リ主上方ハ執柄
小初ノミノリ小ニテ角終リ主上方ハ執柄
事會ノ節會事有利

六 向馬節會 七月

此節會ノ事大方ノ元日ナホトカ行勿
元日ノから後ノカガ賛御屬有くわが

衰日拾芥下末生年

衰日子午生^壬未^丑生^未

子寅申生^癸卯酉生^辰戌

辰戌生^卯巳亥生^寅申

六十人華安黃朱

八云一冬無

天子貝多羅葉。翻譯

名義集二多羅葉。名貝
多此翻岸形。如此方梭
欄直而且高極。高長八
十九尺。華如黃米子。有
人云。一多羅樹高七仞
七尺曰仞。是則樹高四
十九尺。西域記。云南印
建那補羅國北不遠有
多羅樹林三十餘里。其
葉長廣其色光潤諸國
畫寫莫不采用。

御弓。裏書云爲射禮。
供天子御弓也。萬葉歌
曰。御執乃弓。云。一
云俱舍。四肘爲弓量。
一肘一尺八寸四肘七
尺二寸爲弓量。多羅葉
長七尺二寸。

小坐りて押ぐへと諸司法奏とのすすめ
奏。各部省の奏を拂弓奏。拂弓奏の内
每を奏ゆる。とれども御日小あつては
多く省略可。奏と云角。折枝吹奏の
ゆよりくからあつまれば。たゞ拂
弓奏作。やと絶え天竺の見魚羅葉の甚長
さ七尺八寸半。からくにつけも七尺。守つれ
江第抄今案萬葉百御執ノアサ弓上詠之御執ニヨミド讀之ト外音通故ニテ御字故ラクナム
弓。よもと。とく。とはアコモ白馬の角
金とあひ。とまら法節。金と。アリ
そなひ馬の陽の歎なる。考の春法節をなり

是。小坐りて五月七日小都馬と云。もは
青陽左个乘轡路駕倉
龍載青旛衣青衣。
又云立春之日天子
親師三公九卿諸侯大
夫以迎春於東郊還反
賞公卿大夫於朝

天用。史記平準
書云。天用莫。如龍。索隱
云。行天莫。莫。如龍。自易
知。龍是也。地用莫。如馬。
索隱曰。易云行地莫。如馬。
地莫。如馬。是也。人用莫。
知。龜。以龜爲寶。是也。

文德實錄第四仁壽二年正月甲戌幸豐樂院以覽青馬。賜宴。羣臣如常
ノハシガ家敵ノテ。御説人を遣す。されど此
仁財ノ御門事和合。五月小豐樂院よ
う。テ吉馬代。仁壽四年。二月
ノハシガ家敵ノテ。御説人を遣す。されど此
馬七才成。用うどあり。七才。陽の數。歲
が陽の辰なり。又。十支。紀。小向馬とて。此
性。源。年とどと天小向。龍有。地。小向。天を
又。小神用は。能く。地。園。地。人。園。を

○江次第云件御馬本必二十一足也每牛左右寮各十足進之其殘一馬稱之餘馬隔車兩寮互進之

○裏書曰御馬本數二十一足禮記曰以青馬七足然而用二十一足者三七之義也三陽之義七日義之由見寛平御記

○毛ヅゲ毛色書付事心得ナドモ馬數付ル

紀馬八足ト云コラヤシハ

ト歌ヨリ
小安殿江次第抄云大極殿後房也

かく一馬との所とれ事の記すも不
よの事と云ふ事の記すも不
月七月小御門小安殿小御門一御にて宴
會付儀毛ヅゲ毛色やりれ當會付儀なると
云

九 御齋會 八角

是の大極殿ノテ八日より十四日まで七日足
乃家勝主總代兼侍少貳ノク翁家主折
付少主此種うちい國家成謹持とく功能
何より此種うちい國家成謹持とく功能
也此種うちい天平元年十月小大極殿ノ
く金光明經師家勝王經也金光明最勝王經
十卷大唐三藏沙門義淨奉制譯

内道場。僧史略云。内道場起於後魏而得名。

在平隋朝。

文苑英華第二百二十盧綸送契玄法師赴內道場詩。序曰。辭老夫。濟負遇醍醐御呈嬪心。鏡君王賜髻珠降魔須戰否。問疾敢行無深契。何相忘。禪宗本不殊。

壬 真言院御修法 四日

乞も今日より七月にこがり。今金剛

累されひ時事の胎危累多く。小聲く修坊

御後七日乃御修法との此事なりて長

乙年小弘法大師大唐の内道場小次

性靈集補闕鈔卷第九宮中真言院正月御修法奏狀

仁明天皇年號

真言院経文申小尹立壁れく。氣和元

年ノリ大師。勿此法をも。先約矣

十一月乙未上奏

癸亥仲月

同日

治部省ノリ七ヶ日乞修坊の爲人因修

察内官人代々御衣冠と御傳而下。壇而下。大
多御衣裳よへく。雖内侍かうして乞成

ゆふ所不入り候へ。爲人對付く乞と
治部省小法ノリ。御修法と之く。既と
終也。此作。常と不復。之て大元法と

之。乞に傳。小法也。小栗柄常曇律作
仁。天皇御和み手小入裏。之て。栗柄常
元法との人。小聲く此をえ御法と

は。小聲はたゞ手にて。異教も都内
常勝傳在元亨釋書。

法琳寺。捨芥下本法
琳寺太元堂是也。太元

金移給井有之以彼水
行彼法。文德御時常曉

律師入唐之後造之。在

小栗栖。

大輪轉小輪轉。江次

第拟大輪轉女司以下
七人輪轉。叙爵外記進

其勘文中古以下絕舉
江次第三云小輪轉。

閨司主水 東豎

大輪轉 女司 主殿
女官 御手水 女官

掌縫女官 閨司主
水 東豎

うつわ勘文。江次第三
空勘文。自後朱雀院時
不載可叙之者。只載例
許。故稱空勘文。

とくひうかよさにきうとうやおほゆる
あ小栗栖の法琳寺と云ふして呼
うれすひの御輪轉下れ。大旱み祚久死
そばはと呼。一卷がり白就現く雨
とくひう侍多ふとかれ
三 女叙位 江次第三二 四月 江次第三云式日近代擇吉日
小引のうち儀式の女叙位が同
てん小つまんてんきつまん并りアヌラ不
勘文下とひゆわあり。切機。江次第三云
りく叙爵と云れ也。もあいは十家の女相
母也。りもからい其間の常とくんむへく母
れ故年とく女八才とと永命く四十年
芳小かくてみ位。アヌラ也。乞波さ
つをきの法。アヌラはいふ。アヌラ侍掌
侍令婦。翁人東邊皇子。アヌラ也。御叙
じら事あり。一位三位。アヌラへき人也
波の叙ち。ゆくゆくの申すもあたさうとも

キリ。江次第三抄切
枕如勘。枕生。若也。
三位三位。後醍醐
年中行事云二位三位
ナヒキ人アヌラ叙せれ
也。

三子。江次第松云東

堅以三子爲東孺，據舊
傳，多以紀朝臣季明阿

閉宿補友成爲其名，中
古以來以季明定爲其

名，不似尋常事也。

持統天皇御宇。

日本紀持統天皇五年春正

月癸酉朔賜親王諸臣

內親王女王內命婦等

位。

ナリ 神武天皇紀稱
字ヲナリトヨム

わが内侍司れ被官ふあるかと約言乃
て取扱ふとてたゞに馬小者く従奉らる
あきう事し先に三子代りしもさうかく
二子の天子乃まわりうてとくとくは締
約もかくや年每よヤ又代ひ
本立位乃位と稱せきいもくよりむか
居家と相傳へと紀朝臣季明阿と有ゆる
いと姫一きから事奉ふうう持統天皇
法御宇西月か内親王下乃位と稱と仰り
奉女叙位ゆくと見だれ

西座西官記不破節會

西樞爲汝王座

○江次第云賜時服王

定四百二十九人待其

死闕依次補之但改姓

爲臣之闕不補其代隨

即減定額數凡賜祿女

王定二百六十二人其

隨闕補代及改姓不爲

關

非天官相少保通元之妻

中側立ニ加佐ニ陳の在

乃除目ノ上達部ノう

例ハニヒテノ上大ノ

乃久ん既後也經六而ノ

門高ミニニシテノ落同ノ

クノヒテノモアラカニ

ノヒテノモアラカニ

傳 僧堂撰文萬

○江次第云其祿法人別綱二足綿六也

十一日

賤名には外官通しゆと仰きゆゆ也か
賤名には外官通しゆと仰きゆゆ也か
官すは諸國のばくとあくゆの申代

公事原上

執筆

硯 不用筆 不用墨
唐硯 筆管 筆管

等

故實件筆 可用白管

磨墨筆除目薄墨叙位
濃墨云一度磨之不再

磨凡爲令水皆爲墨久
磨之。江次第執筆事

條尻付事依前例是風
記也以略爲先執筆之

人畫自名齋院齋宮不
必注某親王

大間ガク○後醍醐年中

事云凡一人任企七作

法アリ申文讀申、三事物ヲ

見失間其所ヒテ筆ヲ添

テ大間ニ書ツク申文ニシ
ヲカクスミニヨセ物テラク

必筆ヲヒテイタニラク也

名替年限久過

相模國權様正六位上

奏獨補連正停承廢三年
內給佐

近江國少掾正六位上
荊田宿祢信正祐子内
親王延久三年祐山背
正忠不給任符秩蒲代

同任符返上書

常陸國大目正六位上
葛井宿祢宗時支上右
衛門督源朝臣承廢二
年給三田吉頼任符改

任

临时給名替

書

陸奥國介正六位上身
人部宿祢如光停左大
三年臨時給臣承脣
紀久遠改任

薨卒公卿名替

書

播磨國權大掾正六位
上支宿祢友成停故式
康親王寛仁三年
給姓長支改任

國替

伊豆國

祿正六位上金刺宿

祿爲賴停尚侍藤原朝
年給二合所任筑前
祿上毛野高平所任
權祿正六位上伴朝臣
爲重朝臣承暦二年給
依獻五節舞姫二合所
任上總大祿大岳良靖

是名國共替之書様

也

任符返上國替

尾張國

祿正六位上大江朝

臣滿長返上前常陸大
曆五年巡給二合伊豫

年限多過

大隅國

祿正六位上藤原朝

臣篤孝前太皇太后官
永作一年御給伊豫祿

年限多過

備代

次任更任

土佐國

祿正六位上日置

宿禰忠久權大納言藤
元年給二合所任刑部
吉安不給任符秩滿仍爲

任

是得替更任他人申
任同官之書禁也

○朝野羣載第七申名

正六位上藤井宿禰爲
里望播磨祿

右者寛治元年正月以
安倍則枝任備後祿而
稱非本里不賜任符仍
以爲里可被改任之狀

所請如件

承德二年正月廿五日

關白從一位行内大臣

廿五 御齋會内論義 十四日

天極殿七日滿也

十四日御被寄れ給私内論義の御殿
くわづの御物は此時の南風にてあり同前
諭仰すくも御て諭義とされ
内論義とはアセ孝徳天皇御三事四年四
月か西月廿五か御門ホウモウあ_レ資と論義有リて
一千人かの御化粧ホウザンありと目寧記ムカシ御
釐スルとて長旅年貞女四月延焉寺の僧房

藤原朝臣

事體發くもア便う様

其 駄御粥

十九日

蚩尤ト云惡人。本朝月

令云黃帝伐蚩尤之時
以正月十五日伐斬之
其首者上爲天子其身
伏而成蛇靈

夢浮橋河海抄引之

者他國の事も豈かどりの惡人をもす
ウ黃帝とア御門とシテシノ正月十五
日小室むけひよソウモレヌキ首の天狗と
成ムミタガヘ蛇靈とナリ是小室で
えの時アビキア粥代にて庭中小葉と
天狗を參ム後東方向東洋と
ひきもきて乞代食となり季沖代和氣
城のそととひゆ半從ムニセキ辛氏ヒヒ

紀アリ一ノ毛も心ナキテ正月十五
日小室中モアリテアゼハ靈魂
て通稱よスルシテゾハ成ケル事也此
人半生粥代の事也亦有今日是と
まの事はヨリシカドナシ此の祝の事
ゾアリとも御室トシカワニ御 羣衆
の事アリ粥と四方より乞事も多う法
事體發くもア便う様 宽平ノ延喜
年承み是が奉祀シテ正月三日行され
御室の事也山御門より同室祝之御室

御新。雜令云凡進新

之日辨官及式部兵部

宮內省共檢校貯納主

殿寮

江次第云年中所用

御薪諸司並五畿內國

司供進見主殿寮式

其數^ト延喜式見^{アリ}。

延喜式第三十六主殿

寮式年中所用御薪

湯殿料一百八十荷御

画殿御洗料七十二荷

御沐料一百四十荷御

脚水料二百四十荷御

飲料七百八荷儲料二

百荷^{中宮}此御贊殿五荷

己午六日也。延喜式中

官職式正月十六日踏

歌妓女四十六人祿料

細毛綿六百疋預請大

正月十五日^ト。江次

第云正月十六日被行

由事起無所見今案正

月十五六日月明時京

中士女踏歌云見朝野

僉載二十一

藏^ト班賜有差

光源氏物語^ト未摘

花^{コトニラトコタカアル}初音^{コトニラトコタカアル}正

正月十五日^ト。江次

第云正月十六日被行

由事起無所見今案正

月十五六日月明時京

中士女踏歌云見朝野

僉載二十一

廿七 御薪

四日

是の而官志^ト勤戍奉く又酒省小出御先
天武天皇四月正月十日百寮詔人奏成
奉る事と御薪^ト書^ト見^{アリ}御本^ト
ノシテ

六 瑞哥^ト見會

十日

瑞哥^ト見^{アリ}正月十日^ト男瑞^トの事^ト

て御^ト見^{アリ}と云ひとゆうい女瑞哥^トり
それ、十六日^トより光源氏れ御^ト見^{アリ}不
可^ト御^ト見^{アリ}瑞哥^トの事^トとゆう
と^ト行^ト見^{アリ}瑞哥^トの事^トとゆう
と^ト行^ト見^{アリ}瑞哥^トの事^トとゆう
中^トの男女^ト瑞哥^トの事^トとゆう
次^トと^ト年始^トの祝詞^ト御^ト見^{アリ}御^ト見^{アリ}
朝野羣載第二十一載踏歌女踏歌章曲
瑞哥^トの事^トとゆう
小^ト酒^トうり^ト男女^トの事^トとゆう
ア^ト先^ト天武天皇三月正月小^ト酒^ト敵
瑞哥^トの事^トとゆう月^ト比

アセカリ。日本紀私記
云今俗曰阿良礼走師
說此歌曲之終必重稱
萬年阿良礼今故曰萬
歲樂是古語之遺也

アセカリ。日本紀私記
云今俗曰阿良礼走師
說此歌曲之終必重稱
萬年阿良礼今故曰萬
歲樂是古語之遺也

究射禮 十七首

見江次第

建禮門。拾芥云於建
禮門被行之時不開件
門依農東也

清寧天皇の日本紀十
五清寧天皇四年九月
丙子朔天皇御射ミタマ詔
百寮及海表使者射賜
物各有差
○日本紀孝德天皇九年
春正月辛巳詔士大夫等大射宮門内

アセカリ。日本紀私記
云今俗曰阿良礼走師
說此歌曲之終必重稱
萬年阿良礼今故曰萬
歲樂是古語之遺也

玉鬘卷

河海抄同卷カサンノワタノ抄踏歌人以錦造華著冠額也是景高市子

本朝書籍目錄雜部宣命譜一卷

「一」冠自所給之詳見

云云

射射禮乃之りけくせきに仁徳天
内御守ふも藤國よりくの種補タニヒ乃
より的とくまの子摩臣百官と
く此補的射タニヒ小更小射タニヒ
と人ヒトナリタラニヒト小有人ヒト宿祢ヒト人
而りて山的射タニヒナレハ爾今ヒト御お
それとかて御門ミツシマナリしきもくも
奉りきらとあせ又祓禊タニヒアマリ射タニヒ
とくさを可タニヒ射禮タニヒ小吏ヒト四府
よすがいさくさくタニヒ小射タニヒ一は

的臣祖

四府左右近衛左右弁衛

弘仁二年正月小使事ヒト西

賜弓タニヒ

十八日

立次第二以謝禮後朝被行

○裏書云賜弓大藏省
進射遺茅物佐度布
是以弓場殿令四府タニヒ

射タニヒ

之月帶以弓韁授以弓
矢于高禖之前

○禮記月令仲春
之月帶以弓韁授以弓
矢于高禖之前
○近衛院年号
○酒タニヒ。裏書云康治二
年正月欲行罰酒タニヒ
以絕故不行云云

カタナレ

。結政所

見江第十六次

○續後拾遺卷第十六

雜歌中

外記廳結政座子古
官内桂丸今よ荷き
お成りうふれ此
かくみそくらむ

中原師光朝臣

いづくりうれ都次
太桂ころみやに
かくみそくらむ

南所名目抄云一
在外記廳

出立園大曆延文三年
正月卷云於南所門外
得上寫了次第四位立

樹南五位立樹北

御内事の事もて東風而こそ初夏可
ひくひらとて出立曲よかく化すあり事
もてく冬内にて左を陣はせく御紀ハ恒
俗治時^{ハシリコト}の政とくわら宮すらよく西
ノは先南手法政行行始らひと捨形邊
侵れ廢れ改すもだすくまよし

御

人
火
火
火
火

